



TITLE:

戦前における「中間層」の日本人女性の「越境」と「境界」: 高橋鏡子と尾崎孝子を例として

AUTHOR(S):

顔, 杏如

CITATION:

顔, 杏如. 戦前における「中間層」の日本人女性の「越境」と「境界」: 高橋鏡子と尾崎孝子を例として. 2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ報告論文集 2016: 13-17

ISSUE DATE:

2016-06-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215828>

RIGHT:

戦前における「中間層」の日本人女性の「越境」と「境界」

高橋鏡子と尾崎孝子を例として

顔杏如 (YEN Hsin-Ju) *

私の研究と関心

19、20 世紀の台湾社会は、日本帝国の拡張の波に巻き込まれ、どのような人と物の移動、越境が現れ、どのような社会文化の変貌が生まれたのか。それは、私の今に至る研究関心である。私の博士論文は日本人の居住人口の割合が最も高い台北を対象として、台湾に移動して来た日本人の集合的な性質、時代心理、そして、有形と無形の空間に対する感知や景観、時間秩序などを含む「時間」と「空間」における移植、及びそれらが植民地台湾社会へ与えた影響を探究している。

この研究の始まりは、台湾人を主な研究対象とするそれまでの台湾史研究の欠落を補い、在台日本人を台湾という土地の歴史的一部分に包摂しようとする考えに基づいている。また、それまでの「支配—非支配」を軸とする植民地研究に対して、移動者、離郷者、居住者など、複雑で多様な角度から、在台日本人の時代心理と彼らと植民地台湾との関係を解明しようとしている。

このような研究関心の下で、在台日本人の複数、多様な性質を描いてみたが、集団内部の差異を個別に取り扱うことはできなかった。そこで、「中間層」日本人女性の移動と植民地経験に着目し始めた。

研究者に注目された社会上層の官僚夫人、あるいは社会の下層の売春婦だけではなく、植民地には上層でも下層でもない女性が多くいた。彼女たちは帝国と植民地とはどのような関係にあったのか。このワークショップで、目前に完成した二人の中間層の日本女性のケーススタディ¹を通して、「越境」と「境界」をめぐって、若干の比較と討論をしたい。

高橋鏡子と尾崎孝子について

まず、簡単にこの二人の女性の生い立ちと経歴を説明しておく。高橋鏡子は、1884 年に旧士族家に生まれ、1924 年に夫と共に台湾に移り、台北州海山郡の板橋小学校に勤めた。1932 年に日本に戻るまでに、8 年間台湾に住んでいた。鏡子は台湾に移動する以前には、1920 年に夫と内モンゴルへ向かい、蒙古産業会社に勤め、興安嶺下大巴林旗大板上の地に学堂を開いた。1932 年に日本に戻り、東京の満蒙学校に女子部を設け、更に 1935 年には満州国に赴き、哈爾濱学院に勤めた。『蒙古の奥から』(1922)、『女性に映じたる蓬萊ヶ島』(1933)、『女性の踏破せる満蒙』(1933)、『感激の思ひ出』(1942)などの著作を書き留め、モンゴルと台湾経験を記述している。移動と経歴は頗る特別である。

尾崎孝子は、1897 年に商家に生まれ、結婚 3 年後の 1920 年に台湾に渡り、1927 年に夫が結核の療養のため日本に戻るまでに、7 年間余り台湾に居住していた。台湾にいる間、短歌の学習と創作に励み、1926 年に歌集『ねむの花』を出版、また、1928 年に短期渡台の間、随筆『美はしき背景』を完成、出版した。日本に戻った後、『歌壇新報』、

* 国立台湾大学歴史学科、助理教授、東京大学大学院総合文化研究科博士。

¹ 詳細は以下を参照。顔杏如、〈與帝國的腳步俱進—高橋鏡子の跨界、外地経験與國家意識〉、《臺大歴史學報》第 52 期、2013、頁 251-302。顔杏如、〈歌人尾崎孝子の移動與殖民地經驗—在新女性思潮航向夢想的「中間層」〉、《臺灣史研究》、2016 年 6 月、第 23 卷第 2 期 (刊行予定)。

『新日光』などの短歌雑誌の記者として勤め、1950-1954年に逗子町会議員を任じ、短歌の創作を続けながら、数冊の歌集を残し、1970年に鎌倉で世を去る。

鏡子と孝子の出生時点には13年の差があり、旧士族と商家出身の違いと、そこで生まれた学歴や文化資本の違いなどは、後日の移動の動機と植民地経験の差異にも影響を与えていた。一方、彼女たちの間でも共通の部分もある。二人の地理的な越境は1920年に始まり、また共に「中間層」の女性で、夫は植民地官僚体系の下級官吏以下の雇員を勤めている。彼女たちの移動の動機と植民地経験を探ることで、中間層女性と帝国、植民地と重層な関係と境界、そして、その変動を窺える。

越境の背後には

<内的な精神意識>

1920年は高橋鏡子が内モンゴルへ、尾崎孝子は台湾へ向かった年代である。同じ日本帝国の勢力圏への移動だが、かなり異なる精神的な意識に基づいていた。

高橋夫婦はモンゴルへの移動は、蒙古産業会社の総辦・薄益三の誘いで二人が蒙古産業会社の社員として赴いたのである。移動の背後には、軍人である夫が軍縮にあり、ほかの仕事もうまく行かないという経済的な要素と、日本が経済的な手段で中国の東北、内モンゴルで勢力を固めようとする時代的な背景が織りなしたプッシュとプル力が存在していた。しかし、鏡子にとって、彼女はどのようにモンゴル行きの意味合いを考えたのか。

1942年に出版した『感激の思い出』では、夫の壮吉から蒙古行きの相談を聞いたとき、鏡子は山形女学校時代（1900年頃）、地理教師が「日本の植民地には娘子軍（引用者注：売春婦の意）が先に渡って行くから、植民政策が失敗に終わるのだ。もっともっと教養のある女性が男子を助けてどんどん海外に渡って行かなければいけない」²との話をふと思いついた、と回想している。日本帝国主義がピークに至った20世紀初頭、良妻賢母主義が公的な女子教育方針として確立されたと同時に、その一方で、対外的な帝国経営における女性の役割が求められる言説も存在していた。新聞では篤実で、植民地で結婚できる女性の外への移動を奨励していた。地理教師の発言は、このような、植民地へ開拓する時代の流れと重なり、鏡子も疑いなくこの精神を継承したのである。これも、彼女が1924年に台湾へ、1935年に満州へ移動した基本的な精神的な構造である。このような意識は、彼女の文章や著作の中にも現れ、彼女の移動と外地経験に伴って深化、発展して行き、彼女自身も女性の外への開拓を鼓吹する一員にもなった。つまり、旧士族家庭に生まれた鏡子は、外へ移動した精神的な構造は、公的な女子教育と当時の言説の女性に対する期待から深く影響を受けていた。

それに対して、尾崎孝子はかなり異なる動機と状況を提示している。孝子の植民地への移動は、経済的な条件が行き詰まったのではなく、むしろ、生活が一番穏やかな時期にあたる。台湾に渡る動機についての語りには、不自由のない生活に甘んじる自分に不

² 高橋鏡子『感激の思い出』（東京：乙守玉緒、1942；大空社1992復刻）、44-45、253頁。

満を感じ、文学を好み、創作に従事したくて、自己を充実、体験を豊富にするため、植民地への渡航を選択したのである。

自己を追求し、夢を実践することは、孝子が植民地へ移動する精神的な構造だと言える。文学に熱中することによって自己への追求は、幼少時期の 1910 年代の新しい女性像の出現と少女雑誌の流行に遡れる。商家に生まれる孝子は、15 才で高等小学校を卒業し、高等女学校に入らなかった。そのため、良妻賢母主義の女子教育方針の影響範囲内に居らず、学校を通して「男性を補佐し、外へ開拓」というイデオロギーを受けなかった。その一方、マスメディアを通して「新しい女」たちの文学作品や女学生の間で流行した少女雑誌を夢中に読むことによって、新女性の思潮と女学生の間で起こった文学ブームと出会った。

孝子の移動は鏡子とはお互いに対照的である。鏡子と異なり、孝子の最初の越境は、夫と伴うものではなく、夫より先行したのである。また、国家は孝子が外へ移動する視野に入れず、自己への追求こそ、地理的な越境のダイナミズムである。しかも、自己実現に繋がる文学への憧れは、当時の流通するマスメディアを通して芽生えた。

＜ジェンダーの境界と越境＞

鏡子と孝子の移動の軌跡において、ジェンダーの境界とその変動を窺える。鏡子を例として、移動のきっかけは夫の仕事がうまく行かないことを起点としたのであり、自主的な追求や願望によるものではなかった。移動のルートは、夫と兄の人間的なネットワークを頼るもので、内的な精神意識は「良妻賢母」の枠組みの中で展開し、女性の植民地への移動が「男性を補佐する」という位置におかれたのである。

しかしながら、台湾にいる 8 年間、鏡子は小学校の教師を担任するほか、積極的に台北婦人修養会に参加し、雑誌に投稿した文章で国家観念の培養と女子教育の重要性を強調していた。1930 年に、さらに女子高等学院の設置に力を入れた。この過程を通して、鏡子は自分の人間的なネットワークを築き上げ、しかも、公的な国家や社会の領域に踏み込み、もはや良妻賢母の方針下で家に安住する役割ではなくなった。雑誌に載せた文章に現れた国家意識や教育観も徐々に良妻賢母主義を超え、自分なりの解釈や、自分のモンゴル経験に基づいて女性の移動の国家発展における役割を強調した。1935 年に満州に渡ったとき、自分が台湾で築き上げたコネを頼り、しかも夫のために一職を得させた。ジェンダーの秩序では、モンゴル時代の「夫や兄に従うこと」から「夫に従われること」に転換した。一方、尾崎孝子の場合は、移動の最初から「良妻賢母」の枠組みを破り、ジェンダー秩序を変える過程であった。

社会階層の越境と境界

＜学歴と社会階層＞

鏡子と孝子の越境は、地理的あるいはジェンダー的な境界線の移動だけに関わるのではなく、社会階層の流動とも関連する。ところが、旧士族家庭出身の鏡子と商家出身の孝子は、異なる軌跡を呈している。

明治維新以後、武士階級が解体し、家業を有さない旧士族が学校教育を通じた社会階

級の維持と上昇に傾いていた。この背景に基づき、鏡子は教員検定を通し、女子高等教育を受けた。それによって、婚前には経済能力を備え、婚姻を選択できる文化資本を持ち、外地へ向かったとき、相当な待遇と社会地位を有する女教師になれた。

それに対して、商家は伝統的な生産の道具と手段を有し、旧士族家庭ほど教育を重視しなかった。従って、女学校に入ることなく、学歴や資格を持たない孝子は、第一次世界大戦後故郷を離れ都市で生活を営むとき、中層や下層の労働者になった。植民地に移動したときも、鏡子と異なり、安定で体面ある、もしくは特定な技能の必要な職業に就くことはできなかった。渡台後の一年間半は植物園の標本館で助手を勤め、「日給」という所得形態と生活水準は中層や下層の労働階層に近い。この状態は夫が渡台して官庁で職を得るまで続いた。

地方から都市へ、家庭に入り、都市から植民地へ、このような鏡子と孝子の移動の過程は、それぞれ「旧士族／新中間層」、「旧中間層／中下労働階層／新中間層」という社会階層の流動を経験した。

＜「新中間層」の形成と植民地社会＞

この二人の女性の親族と彼らの就職の過程と職業の性質を検証すれば、植民地での「新中間層」の形成の様態と、それと植民地との関係が浮かび上がる。

鏡子の夫壯吉は台湾で憲兵隊長を勤めた兄とそこから延長した県人会のネットワークを頼って、専売局台北菸草工場の雇員の職を得た。孝子の夫保正、妹の夫の高橋堅吉とも、親族とそこから延長した人間的なネットワークを通して、総督府の雇員の職をえた。そして、堅吉は専売局の地方支局の間で転々して、1943年に台南支局長になった。

日本本土の工業化、商業化、都市化などの内的な構造で形成した「新中間層」と違って、植民地台湾の領有に従って、統治に必要な、大量な官吏や、官僚体制の下で非公式的な雇用の隙間は、植民地の在台日本人の「新中間層」が形成される重要なルートの一つとなった。尾崎と二つの高橋家の例はまさにこのような様相を呈していた。

また、植民地社会の権力構造は、この両家の社会階層を日本本土にいる時より高くさせた。尾崎家は都市の中の「洋服細民」から、官庁のサラリーをもらい穏やかな生活を過ごせる「新中間層」になった。高橋家は日本本土の「失業者」、「浪人」から、植民地で安定な職を得て、しかも在台日本人社会での活躍者に変身した。

一方、鏡子と孝子はそれぞれ親族や職場、婦人団体、教化あるいは文芸的な結社など多重な生活圏と人間関係を持っていたが、居住地域や生活圏とも、在台日本人の都市中間層のそれに傾き、台湾人の生活圏との関わりは少なく、台湾人との接触もまれであった。在台日本人の中間層と現地社会との間には境界が存在していた。

＜自己実現の場＞

家族の社会的な地位が上へ流動したほか、鏡子と孝子は共通する特色を持っている。即ち、二人とも植民地で「出世」した機会と舞台を獲たのである。

鏡子は積極的に官夫人たちを中心とする婦人修養会に参加し、社会教化運動での活躍ぶりを通して、日本本土では得られない機会と自己実現を手に入れた。孝子は官製の婦人団体には無関心だが、自由に家計関係の婦人会を成立した。それと同時に、短歌の結

社に参加し、歌集を出版して創作の職業生涯を展開し始めた。二人は全く異なる方向に進んでいたが、同じく自己実現の場を台湾で獲得した。その背後の要素を分析してみると、鏡子にとっては、権力に近づく機会と場を得、孝子にとっては、束縛と伝統的な秩序を離脱できる場を得たからである。この全く反対のように見える要素は、同じ磁場に由来する。即ち日本帝国空間における植民地の辺境的な位置である。

また、植民地の権力構造が日本人により優遇的な生活的、経済的条件を提供していることも、鏡子と孝子が越境したあとに自分の夢を实践する余裕ができた、構造的な要因である。一方、「中間層」という立場こそ、現状に満足せず、出世したいという潜在的な欲望を持つ、鏡子と孝子が共通した内的な要素でもある

むすびにかえて

鏡子と孝子はそれぞれ異なる中間層日本女性の類型を示している。移動の背後のダイナミズムや植民地での営み、国家との関係、いずれも恰も両極に位置している。其の一方、構造的な共通性を持っている——植民地は自己を实践する場であり、社会階層を向上する場でもあった。二人の経歴は特殊であるように見えるが、特例ではなく、同じ時代に、似ている姿は少なくなかった。

これらの女性の移動の軌跡は、日本帝国の拡張が日本における異なる集合体の「周縁者」に外へ機会を見つける空間を提供することを示し、1920年代の中間層女性が外へ移動した複雑で多様なダイナミズムと歴史像を織り出した。また、日本本土での思潮は如何に移動を通して、「辺境」の地で発酵されたり実践されたりして、更に、女性の主体性によって変容されたのかを示している。彼女たちの言説や考えはまたどのように台湾人女性によって植民地で流通、再現、実践、或いは形を変えられたのかはこれからの課題である。